

未来の水を守るためにできること

兵庫県

兵庫教育大学附属中学校

三年

戸田

侑希音

「わあ、ダメ、ダメ！それ、食べたらかん！」心地よい天気だったので家から少し遠い地元でも有名な鬮灘まで愛犬と散歩をしていた時、愛犬が一生懸命に匂いを嗅ぐので思わずリードを引っ張った。そこにあったのはビニール袋と食べた後の菓子袋だった。春風がびゅつと吹いてビニール袋は遠く飛んで行った。どこに行ったのか気になって空を見上げると、トンビがゆつくりと円を描くように飛んでいる。下へ行ったのかと思えば橋の下を覗いてみたら、川の隅の岩にゴミがいくつかくっついていた。よく見るとペットボトルのような食べた後の容器のようなものだった。私が探していたゴミではないようだったけれど、どうしてゴミが川にあるのか、そこからどこにいくのかなと考えていると、「五月になったら鮎漁解禁するのにゴミがあつたらせつかくの鮎も嫌やろな」と、母がつぶやいた。何だかその言葉にゾツとして、プラスチックが川にたどり着く方法を調べることにした。

風に運ばれたゴミは、排水管を通り川から海へ流されていきその過程で小さくなるそうだ。それらが海洋汚染の原因の一つになっているマイクロプラスチックの原料になっているのだ。世界で毎年八百万トンのプラスチックが正しく処理されず海に流されていて、それはジャンボジェット機五万機に相当するそうだ。プラスチックは軽いので風や海に流れやすく、紫外線を受けてもろくならない。プラスチックは私たちの生活の中で欠かせない便利なものだ。しかし木や紙なら微生物の力で分解され土に戻る事ができるが、プラスチックはそのまま何百年も残り続け土に還れない。また海上を浮遊しているゴミだけではなく、海の底には多くの沈んだ食品包装が山のようになりゴミ溜まりのような場所となって世界中にあるそうだ。深海は紫外線も届かず水温も低いいためプラスチックがそのまま残るので、なかには製造日昭和五十九年と鮮明に印刷され無傷な物まで発見されたそうだ。世界中の改定にゴミの溜まり場があ

り日本も例外ではないことを知って怖くなった。やはりそうなるかと食物連鎖に影響が出てくるのは当然だと思う。海に流れたプラスチックを魚が餌と間違えたり、本来プランクトンを食べるはずなのにそれではなくプラスチックでお腹をいっぱいにした魚を私たちが食べているのだ。そうやって知らず知らずのうちに自分たちがしている行動が自分の身体だけでなく、生態系を壊し川や海も汚染しているのかとショックだった。

でも、私たちは食物連鎖によって全ての生き物とつながっている。つまり、不自然な自然を省いて生活しているようでいて、実は私たちこそが生かされているのではないかと調べているうちに気がついた。私たちは他の人と意思疎通を取ることができ、川や海、自然はどうだろうか。彼らは痛いとも苦しいとも言うことはできない。私たちが気づき立ち止まって考えないといけないのではないだろうか。まずは、行動してみることが大切だと思う。簡単なことから、例えばエコバックを使う、うがいや歯磨きの際に水を出しっぱなしにしないといったことは今日からすぐに行えることだと思う。

私が母と愛犬と散歩したように四十年後私も自分の子とこのきれいな場所を歩けるようにするには、次の世代を担う私たちがどのように行動していくかがカギだと思う。未来でも空ではトンビが飛び、鬮灘の川が今のように豪快な音を立て飛び鮎が見続けられるように。これから散歩の時にはゴミを拾いながら歩いてみようと思う。